

銀の匙

映画文学人生論

原作：中勘助 (1913-14) 「東京朝日新聞」

参考：『提婆達多』（那珂）(1921) 「新潮社」

『菩提樹の蔭』（1931）「岩波書店」

富岡多恵子 『中勘助の恋』（1993）「創元社」

橋本武 『銀の匙の国語授業』（2012）（岩波書店）

虚弱のため智慧のつくのが遅れ、意気地なしの泣き虫で、家のものはみんな章魚坊主といった

中勘助『銀の匙』は二十七歳の作者が幼い頃の思い出を幼い頃の感性で書いた小説である。前篇と後篇との二部構成となっている。

銀の匙は、頭から顔までいちめんふきでものができた「私」の小さな口へ薬をすくい入れるのに伯母さんがさがしてきてくれた思い出の匙。

主人公の「私」は、神田で生まれた江戸っ子だが、親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている坊っちゃんではない。虚弱のため智慧のつくのが遅れ、意気地なしの泣き虫だった。痩せほうけて肋骨があらわれ、顔ばかり大きくて眼がひっこんでいたため家の者はみんな章魚坊主、章魚坊主（たこぼうず）といった。

そんな弱虫をかわいがってくれた人がいる。家はなし、子はなし、年もとっている伯母さんは弱虫の「私」を育てるのがこの世に生きている唯一の楽しみだった。「私」も伯母さん以外の家の者に何かいわれてもろくに返事もせず、笑顔をみせることもほとんどなかった。

近所のわんぱくどもは「私」のような意気地なしは相手にしないが、伯母さんがお国さんという女の子の遊び相手を見つけくれた。その子と仲よく遊ぶ安穏な日をおくっているうちに一大事がおこった。二人とも八つになって、学校へあがらなければならなかったのだ。



銀の匙

映画文学人生論

あんな意地の悪そうな子のうようよいるところへどうして行かれよう。「私」はお国さんと約束して、行かないといつてがんばっていたが、兄がいきなり衿（えり）くびをつかまえて畳へたたきつけたあげく続きざまに頬ぺたを打った。

やむなく学校へ行くと、いちばん前の席へ腰かけさせられた。頭の悪い、びりっこけの席だ。お国さんは遠方へ引越し、代わりに遊び友だちになったお恵ちゃんから、「びりっこけなんぞと遊ばない」と言われてしまった。

「私」はおさらいやしたしらべをするようになり、次の学期には二番になった。お恵ちゃんとも仲直りをし、それからはお恵ちゃんは毎日お手玉をもつて家に遊びにきた。ひよわだった体もめきめき達者になり、弱虫が餓鬼大将に変身した。

後篇になって、注目されるのは「私」の非国民的発言。戦争談に花を咲かせたとき、結局日本は支那に負けるだろうといったのだ。「先生、日本人に大和魂があれば、支那人には支那魂があるでしょう。日本に加藤清正や北条時宗がいれば支那にだって関羽や張飛がいるじゃありませんか」。理屈はその通りである。日清戦争で日本が負けるといふ予言はずれたが、昭和二十年、日中戦争の結末までふくめて、長い目でみれば、はずれていない。弱虫の章魚坊主、侮るべからず。

独り碁や笹に粉雪のつもる日に

中勘助